

国崎望久太郎著

「啄木論序説」

相 楽 俊 暁

「ニーチエの主体的な自己主張の首尾一貫性を自己のものとしようと決意したところに、『卓上一枝』の悲鳴に、似た論調の切実性があった。」(P189)——これは「啄木論序説」の要旨ではない。しかしこのことばを啄木に即しつつ、もっとも精密に説明したものが本論であると言えると思う。冒頭に引用した部分の「ニーチエの主体的な自己主張の首尾一貫性を自己のものとしよう」は啄木の浪漫主義の基本的姿勢であり、そこに浪漫的体験(与謝野晶子)と浪漫的思考(高山樗牛)との統一的把持者たる啄木の原形質がある。

「……と決意(再確認)したところに、『卓上一枝』の……」には自然主義と啄木との対決の実相があり、社会主義を発見する契機があ

つて啄木の社会主義の性格を限定する。そして「悲鳴に似た論調の切実性」には、イデオロギー(社会主義)よりも切実な主体的要求——啄木の実存心情の志向性についての国崎氏の洞察がこめられている。

「啄木論序説」は啄木の全円的人間像を確立しようとした労作である。そしてこれは、中野重治氏の「啄木に関する断片(一九二六昭和元年)」を先駆とする啄木論の今日の類型を打破しようとする主張を持つている。中野氏の「イデオロギーに基づく啄木観の誤り」は、その結論とともに方法にもありとするのである。中野氏の「主として彼(啄木)の思想について、その思想の変遷について考え」る方法からは「詩と短歌」をその本質から除外

したところの「革命的詩人啄木」が発見されたのであるが、それが詩と短歌とのみを見たために啄木を誤つたところの曲解者から眞の啄木の姿を取り戻すことであつたとしても、その抒情詩的創作活動と全くかかわりのない「革命的詩人」とは一体何か、ここに国崎氏の啄木の全円的人間像確立の主張がある。

本論はその主張を主観的に展開することをさけ「できたら啄木みずからに語りめしよ」うとし、啄木の文章について「注釈を試みるぐらいの態度で」「明治の末期に生きた誠実な一人の文学者、詩人」を全体的に把握し論証しようとする態度で貫ぬかれている。

従来の啄木論の欠陥について国崎氏は更に具体的に次の諸点を指摘している。

(1)日本の文学運動はこきざみに足早に展開したが、それよりも一層こきざみに足早に啄木が歩いた事情が不思議にも看過されていることとP.11(時代に先駆した詩人とされている彼は明星の浪漫主義の衰退期に浪漫詩人として登場し、自然主義の解体期に自然主義思想を追い、社会主義弾圧後に社会主義思想に辿りついた文学者である事実。)

(2)自己を社会主義者と規定することによつて

は完全に満たされなかつた啄木の自我が、無意識のうちに発見した実存主義的視野の存在を当然予想させられるものがあるが、この側面が従来まったく不問に附されていること。P. 28 (啄木は詩人、なかならず歌人としての仕事によつてもう一度統一的に評価されねばならないこと。)

(3) 浪漫主義時代の啄木について、従来の啄木論が重要視していないこと。P. 72

(4) 日本の自然主義作家の最も具体的な困難にみちた闘争の場所は「家」であつたが、啄木は偶然的な条件(宮崎郁雨の援助)によつて封建的家族制度との対決をへずに、国家権力の問題を発見した。P. 126 P. 176

右の諸点の中で(3)が本論の最も重要な問題点をなしている。

国崎氏は、浪漫主義時代の啄木が高く評価されていないのに理由のあることを認めつつも、一方啄木の文学的主体を考察する上では彼の本質を解く鍵として、彼の生涯の「あらゆる問題の究極最後のなげりどころとして、あくまで確保された自我についての啄木の信念は、この浪漫主義時代に形成された。」と断定し、中学在学中に明星との接触によつて

なされた文学的出発は、「文学史的には、俊敏な一人の若者をして浪漫的思考を徹底的に追尋せしめて、社会主義思想に到達させることによつて、複雑にして多様な意を味持つ展望点を構築させた。(中略)その点を具体的に考察しようとするのが本論の主旨である。」との基本的態度を示している。初期の啄木の作品が晶子の模倣であるか否かではなく、模倣の奥に啄木の烈しい浪漫的姿勢の確立があつたとし、この基礎体験が高山樗牛の理論を吸収して啄木の浪漫的思考の展開がなされる——浪漫主義から自然主義へ更に社会主義への、展開の可能性もそこにあり、より以上に限界もそこにあるとする。

啄木は彼自身の人間の成長の過程に於て、新詩社を批判し、高山樗牛を批判し、やがて自然主義(純粹自然主義)を否定し、幸徳秋水事件を契機として社会主義・クロポトキンのアナキズム、無政府主義に進み、はては金田一京助氏の伝える「帝國主義的社会主義」なるものに漂着する。イデオロギーを前提とする啄木論者が大いに強調する資料も、或は隠蔽し抹殺したい衝動に駆られそうな資料も、国崎氏はあるがまゝに列挙しつつ啄木の客観的

全円の間像探求の態度で検討を進めて行く。

この推移はすべて「浪漫主義的啄木」、「なしは「啄木の浪漫主義的思考」の展開であり、「英雄的自負」「希望」「自信」から「生活との苦闘」へ、「絶望的状況への必死の抵抗」、「虚無との戦い」から「破滅的な死」への推移であり、すべてを貫ぬくものは「自己主張の強烈な欲求」であり、「自己拡張」の内的要請であり、自我、主体、実存に関わる推移である。国崎氏はこの啄木の浪漫的な生涯の展開から実存主義的課題を見出すのである。

「実存主義的人間とは、本来、現実をあくまで主体的に生き抜こうとする人間である。」「何らかの固定した思想やイデオロギーを前提とすることを排するのが実存主義的思考の立場であつた。」この見地から従来の類型的啄木観の殻を破つて、実存主義的人間啄木を掘り出そうとするのである。さまざまな思想傾向に対する啄木の敏感な反応の底に、無意識であつても実存主義的課題への接近があり、そして解決されないままに残つた問題が多く、そこに啄木に関する今日の問題、現代

的意義があると結論づける。そして、ここから啄木の詩、および短歌に対する新しい評価がなされるのである。

明治社会からの落伍者でった啄木の悲劇は、その生活と文学との分裂にあった。その統一が可能であつたはずの小説において挫折した結果、その分裂はそのまゝ評論と詩・短歌との分裂となつた。彼の詩や短歌は、彼に自覚された思想と次元を異にしたより深く痛切な実存的心情に根ざしていた。そして彼の文学主体の本質はやはりここにあつた。詩は前向きな姿勢で発想されるが、その詩的真実は、「呼子と口笛」八篇の中の「家」「飛行機」などの感傷性にある。それは短歌にも共通する。短歌はしかしいわゆる「悲しき玩具」として彼の文学活動の系列の中に逆説的に位置づけられる。けれども事実には詩以上に強く彼を吸引する。そして近代短歌史の展開の中で真に特色づける新しいもの、多くの影響を後に残したものは、現実生活の中での利他的感情の定着した作品である。

この論文が極めて客観的な学問的な態度によつて綿密に論証されて行く中で特に注目すべき点は、第四章「自然主義との接触」と第

五章「自然主義批判について」であろう。なにかんづく「卓上一枝」の啄木の生涯における意義及びその注釈である。国崎氏の「卓上一枝」の意義づけから、従来の類型的啄木観と、実存主義的人間（自我、個性、実存、時代性）啄木とが具体的に明瞭に分かれてくる。啄木の生涯の一つの転機が新しい視点からとらえられている。自信、充実、攻撃から不安、虚無、防禦の痛ましい戦いへの移行——

実存の課題はこのあたりから痛切ににじみ出てくる。このあたり熟読すべきであろう。冒頭に引用した「悲鳴に似た論調」はその部分を前後関係から読む時、読者の胸にひびくものがある。そして私の読んだかぎり、ここでのみ国崎氏は情的な表現をなしていて、評論文的主観の奔放に対する極度の自制を意識的に解放した箇所のように感じた。ここで私は啄木に対するしみじみとした同情をこめた「笑い」を衝動として感じた。だがこれは評論文からくる感動にほとんど類似した感銘であつた。

飛躍するが、ここで私はふと中村光夫氏の「二葉亭四迷伝」（昭和三十三年十二月）の序文を想起する。中村氏が二葉亭の没年と同年

輩になつて墓参りをしたということ——中村氏は伝記を書く資格が出来たということをしみじみとした感慨をこめて書いていた。啄木は二十七歳、明治四十五年に若くして死んだ。

国崎氏は冷厳につきはなして事実在即して論述しているが、国崎氏はその心の底に若輩に対する暖かい愛情といったわりをもつていることを行間に感ずる。私は本論を読みながら極めて客観的な評論として受け取つている。これはどういふことであろうか。一体評論と学術論文（作家論）とを区別する線はどこにあるのだろうか。国崎氏は「実証的な考察は今後も進むであろうが、ある意味ではもう限界にきている。そしてそれがかえつて実りのない多くの啄木論をかかせている。」と、その序で述べている。従つてこれは、国崎氏の独特の「論文の方法」であろう。ここにも氏の主張がこもつていると思う。氏は氏自身の創作的資質を自覚的に否定してかかつていると思う。にもかかわらず、読者の感銘は、否定からにじみ出る創作的、評伝的な文に接した感銘であつた。これは評論的な作家論であろうか、そしてこれが氏の志向される新しい作家論であろうか。甚だ興味深い。綿密に

(昭和三五年月刊・A5判・二八一頁
五二〇円・法律文化社)

資料に即した論述であるが、その論理は仮説に對する摸索を通した論理展開というよりも、また、資料の検討の結果から得たというよりも、もちろんそれもあるが、啄木の作品の享受者としての鋭い感受性の直観がゆるぎない確信として氏にはあり、それを氏および学界の発見した豊富な資料を主観を殺して客觀的に駆使し、綿密に論証されたもののように感ずる。注目すべき論文である。

それから今一つ、啄木においてこれほど根強く生涯を貫ぬいた内的要求、自己主張の意欲、自己拡大の衝動は、明星との接觸からのみ開始されたのだろうか。そうとは思えない。十四歳からの堀合節子との十代における交友關係のありかた、恋愛の内容中、中学でのストライキ、こうした傾向性を生み出したものは、先天的資質の方向性、いや、それ以上に後天的に十四歳以前の人間形成に何か注目すべきものがあるのではなからうか。冒頭の「悲鳴」はやがて破滅して行くもののものである。これは明星との接觸に始まる傾向性からくるもののみであらうか。

(文中著者に對する敬語を省いた非礼をお詫び致します。)

昭和三十六年三月二十五日印刷
昭和三十六年三月三十一日發行

非売品

編集兼 立命館大学日本文学会
發行者 森 本 修

印刷所 大津市膳所丸ノ内町三六

萩 原 清 雄

發行所 京都市上京区河原通

広小路西入ル

立命館大学日本文学会

本会への入会申込・会費の払込はすべて左記へお願い致します。

入会金 五拾円

会費 一年四百円(四回分納も可)

京都市西陣局区内

河原町通広小路西入ル

立命館大学文学部内

立命館大学日本文学会

振替京都三三八三番